

(様式) 府立松原高等学校 「学校運営協議会」 報告書 (第3回)

日 時	平成31年2月16日 (土) 14:00~16:00			
出席者	運営協議会委員	職名等	学校事務局	校務分掌等
	房 本 晃	社会福祉法人 バオバブ福祉会理事	平 野 智 之	校長
	菊 地 栄 治	早稲田大学教授	島 岡 律 子	教頭
	前 崎 卓	松原市立松原第三中学校長	木 村 悠	首席
	野 崎 和 枝	本校PTA会長	伊 藤 あ ゆ	首席
			山 口 裕 子	人権教育主担
	教職員等			
	林 知彦 (1学年代表) 田ノ上 優光 (1学年) 岩崎 江津子 (2学年代表) 南岡 靖之 (2学年) 中川 泰輔 (2学年人担) 深井 恵介 (3学年代表) 松永 かをり (3学年) 宮本 陸 (3学年)			
おもな テーマ	今年度のふりかえりと次年度に向けて 運営協議会委員からの感想・提言			
協議内容 の概略	<p>① 平成30年度・平成31年度学校経営計画及び学校評価、学校教育自己診断アンケート (校長) 学校生活の充実度は80%と引き続き高い。また、深い学びプロジェクトの成果として授業のわかりやすさへの肯定回答が微増している。松高版子ども食堂や通級は、地域や外部からの評価も高く、本校の取り組みが教育と福祉をつなげるモデルとなっている。</p> <p>② 今年度の「こんな生徒とのかかわり」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活指導 (田ノ上教諭) …生育や生活背景が子どもに与える影響について、わかったつもりでいた。生徒には高校3年間で人から大切にされる経験をしてほしい。教員が愛情をもって接していればいいと思っていたが、大切にされている、ということは伝えなければわからない。その工夫をしていく。 ・インクルーシブ教育 (宮本教諭) …個別支援が必要な生徒について、どうしたら自分に関われるかばかりを考えていたが、それだけでなく本人の特性や、内に秘めた思いや力を引き出して成長につなげていく。また、支えられた、ではなく、ただの友達でいる生徒たちの姿が「ともに学びともに育つ」カタチをあらわしていた。 ・高等学校における通級による指導…大橋教諭の取り組みより、2点を確認。まず、生徒が自分で見つけた課題・達成したい目標を取り扱うこと。次に、授業の時間内だけで実施するのではなく、担任やその他の教科担当者とあらゆる場面での本人の様子や課題について関係者で共通認識をし、連携すること。 ・起立性調節障がいガイドライン (松永教諭) …授業や雑談を繰り返し、特別なことはしていない。ただ、自分ががんばれたから卒業できた、と失われた自信を取り戻してほしかった。(目標の達成状況による評価については、) 学力がしんどい生徒に対しては、今のやりかたではしんどいのでは。 			
提 言 内 容・改善 方策	<ul style="list-style-type: none"> ・宝物のような先生方が幾人も松高にいる。それが、松原にあることの意義は深い。松高を受験するモチベーションに変化が出てきた。さらなる連携が必要。 ・入り口は何でも良い。来てみちゃった、けど経験の中で変わっていくことに社会的に価値がある。 ・寄り添って離れない、ということは教師然とすればするほど、実は損なわれる。それが損なわれずに残っている。(ともに学びともに育つ実践には) 当事者研究の究極の形がある。 ・受験の際に松高を見学した子どもは「松高はみんな笑ってた」と言った。家庭でも松高組がある。 ・一人の子を、どういう見方でどういう関係を持つのか。支える、でスタートして支えられるに転換するはず。感動ポルノを否定して、本人が要求されることで葛藤があり、それを越えていくのが水平な関係。インクルーシブとはそういうこと。松高に対する「感動ポルノ」の幻想に対して、生徒の個別性を保障して。自分が好ましい、仲間とおったらすばらしい、という宣伝を。 			